

英語語法文法学会設立趣意書

1930年代以降の英語学および言語学の理論的な発展にはめざましいものがあります。伝統文法からアメリカ構造主義言語学、そして変形生成文法、GB理論等、理論は周期的に質的な発展を遂げ、さらに今また大きな転換期を迎えようとしています。日本の英語学研究者もその都度理論的な知見を取り入れ、英語教育と研究に多大の貢献をし、そして現在も数千もしくは数万にも達しようとする英語教育者、研究者が日夜教育と研究に励んでおります。また、多くの学会、研究会が全国的または地域的規模で組織される等、英語学およびその研究者を取り巻く状況は隆盛を極めているように思えます。

しかしながら、特に過去30数年における文法理論の発展を見る限りは、それが英語の文法の実証的記述に必ずしも有益な示唆を与えてくれたとは言えないのが実状です。その原因は、それらの文法理論が一様に個別言語から離れた抽象度の高い普遍文法理論の構築を最重要課題として設定していることにあります。そしてそのような学問の趨勢を反映して各種の学界の関心も主として理論的な研究に向けられるようになりました。研究発表、シンポジウム、ワークショップもそれらの大部分が純理論的な研究で占められ、またそのような尺度で測られるようになりました。その結果その間に個別言語としての英語の実態を体系的に明らかにしようとする数多くの優秀な研究が全国的に公にされることがなかったという事態が生じていることは誠に残念というほかありません。

言語研究においては、普遍文法から個別文法へ、または個別文法から普遍文法など多様な接近法が認められます。しかしながらいずれの接近法をとるにしても個別言語の記述的体系化はその前提でなければならないと考えます。特に日々英語を教え、また英語の学問を志す私達にとって、英語の具体的な語彙や構文の特性を一つ一つ明らかにするという態度は忘れてはならない原点であります。事実これまでの英語学を底辺から支えてきたのはまさにそのような地道な研究であり、そこから私達自身も多くのことを学んできました。このような立場に立つ多くの現在の、そしてこれからの前途有望な全国の研究者、英語教育者の為の学問的交流と研究成果の発表の場はさらに保証されなければなりません。そのような研究からもたらされる学問的成果は測り知れないものがあります。以上のことからここに新しい学会「英語語法文法学会」の創設を提案するものです。

設立発起人

赤野一郎	秋元実治	後藤 弘	後藤正紘	広瀬浩三	柏野健次
衣笠忠司	児玉徳美	好田 實	巻下吉夫	三木悦三	南出康世
村田勇三郎	中村順良	西川盛雄	織田 稔	小川洋通	大沼雅彦
澤田治美	高原 脩	田中廣明	梅田 巖	山崎和夫	内田聖二
和田四郎	八木克正	山田政美	安井 泉 (ABC 順)		